つ な ぐ だ よ り

発行　　２０２５年　９月
発行人　地域学校協働活動推進員
後藤弥生

新学期が始まりました。久々に子供たちの声が校舎に響き渡りこの町も活気を取り戻した様です。さて、近隣の畑や田んぼでは秋の収穫に向けて稲刈りや銀杏の収穫で秋の風情を感じる時期となりました。秋は運動会、地区運動会、修学旅行、サンドフェス、祖父江いちょう祭りなど一大イベントが盛りだくさんです。こうした行事のひとつひとつには、地域の皆さんの支えや協力があります。校庭に響く声援、祭りを彩る準備の手、子どもたちを見守る暖かなまなざし。それらはすべて、地域と学校、そして家庭を結び大切な絆です。子どもたちはその中で多くの人に支えられていることを体で感じ、学んでいきます。地域と繋がることは子供たちの成長にとって欠かせない力となり、その記憶は次の代へと繋がっていくのです。

それでは、今回は盛りだくさんでお届けします。ぜひ最後までお読みいただけたら嬉しいです。

▼　9. 19　PTA 研修「多肉植物寄せ植え講座」を終えて

先日、PTA 研修として「多肉植物寄せ植え講座」が開催されました。講師の先生をお招きし、好きな多肉植物を選んで寄せ植えに挑戦。小さな鉢の中に自分だけの世界をつくり上げる作業に、皆さん真剣かつ楽しそうに取り組まれていました。　寄せ植えのコツやお手入れ方法をめぐって質問が飛び交い、会場は笑顔と会話であふれました。普段はあまり接点のなかった方とも自然に言葉を交わすことができ、そこから新しいつながりが広がっていくのを感じられたのも、この研修ならではの魅力でした。集中して手を動かすことで日常の忙しさを忘れ、心がリフレッシュされる時間となりました。　完成した作品を手にした皆さんの表情には達成感と喜びがあり、ご家庭に持ち帰った後も癒しや話題が広がっていくことと思います。　このような素敵な機会を準備してくださった研修委員会の皆様に、心より感謝申し上げます。今回の体験で得た学びと交流が、これからの学校や地域のつながりをさらに深めていけるといいですね。

▼　9. 22　5年生の稲刈り体験がありました。

春に植えたお米が実り、５年生が稲刈りを行いました。田んぼに入り、松山農産の方から鎌の使い方や稲の刈り方を教わった後、一斉に稲刈りがスタート。初めての作業に戸惑いながらも、子供たちは真剣な表情で稲を刈り、稲藁を束ねていきました。束ねる作業は難しく、友達と協力しながら何度も挑戦する姿が見られました。秋晴れの澄み渡る空の下、子供たちの元気な声が田んぼに響き渡り、自然と笑顔がこぼれます。

普段何気なく食べているお米が、たくさんの工程を経て自分の口に入ることを、実体験を通して学んだ子供たち。この経験が、食への感謝や地域への関心につながることを願っています。

▼　9. 24 地域学校協働活動推進委員会　会議報告

先日、稲沢市内の全小中学校の教員と地域学校協働活動推進委員が一堂に会し、地域と学校の連携について話し合う会議が行われました。千代田地区の取り組みについて事例発表があり、その後、祖父江町地区のグループ別情報交換が行われました。会議を通して、地域と学校の連携のあり方は地区によってさまざまであることが改めて浮き彫りになりました。理想的な連携が取れている地区もあれば、課題を抱えている地区もあります。

私たち祖父江小学校地区では、地域との連携がしっかりと築かれており、それぞれの活動も活発です。こうした取り組みは、モデル地区として他の地域の参考にもなると感じました。この連携を次の世代へとつなげていくためには、地域に関心を持つ大人の存在はもちろん、子供の頃からの体験の積み重ねが何よりも大切です。地域と学校が手を取り合い、未来を育む土壌を広げていくことが、私たちの使命だと改めて感じました。

祖父江地区運動会、今年も開催！～三世代交流で地域に活力を～

祖父江小学校の運動会の午後から、祖父江地区体育振興会による「地区運動会」が開催されます。地域の皆さんが世代を超えて交流するこのイベントについて、体育振興会の諏訪会長にお話を伺いました。

Q：地区運動会の目的は？
A：　三世代交流を目的として毎年行っています。
Q：今年の競技の目玉は？
A：　高齢者向けの競技や、全員参加型の競技を新たに取り入れました。どの世代でも輝けるように工夫しています。
Q：地域の皆さんへメッセージを
A：　昨年は雨で中止となってしまった地区運動会。今年はその分も楽しもうと、会員みんな盛り上がっています。毎年来てくださっている方も、まだ来たことのない方も、ぜひお誘いあわせの上お越しください。一緒に地域を盛り上げましょう！

～こんにちは！まちのひと～

この町には、日々の暮らしを支え、子どもたちの学びや笑顔を広げてくださる「まちのひと」がたくさんいます。普段はなかなか知る事のできない思いやとりくみを皆さんにご紹介していただきたいと思います。

今回は、珍しい取り組みで地域を元気にしている「稲沢フルーツ園」の社長である佐藤さんにお話をお伺いしました。

「始まりは１０年以上前になります。先代が病気をきっかけに「安心して食べられるものを育てたい」と願い、農薬を使わないバナナ栽培に挑戦したのが出発点です。手作りでデータを集め、失敗を重ねながら、ようやく４年目に収穫を迎えることができました。小学校の見学を受け入れると子供たちは緑色のバナナに驚き、「バナナは木ではなく草なんだよ」という話を目を丸くして聞き入っていました。花一つからから実ができるという説明にも歓声が上がり子供たちの笑顔が何よりも力になるます。」と話してくださりました。将来の夢をお聞きすると、「バナナで紙作りに挑戦したい！それに、給食でうちのバナナを食べてもらえたら」と、地元に新しい魅力を生み、子どもたちの暮らしに笑顔を届けている佐藤社長にこれからも目が離せません。

※稲沢フルーツ園ではバナナのもぎ取り体験や、バナナのほかに２０種類以上のフルーツを栽培しています。併設しているカフェ＆直売所では旬の無農薬野菜をはじめ農園で採れたフルーツを使用したデザートが人気です。

コラム～インクルーシブな地域を目指して～

インクルーシブという言葉を知ると、どうしても「障害のある人」「健常者」という区別に向き合わざるを得ません。そもそも、私たちはなぜ分けてきたのでしょうか。気づけば社会は多数派が生きやすいようにつくられ、そこに馴染めない人たちが「特別な存在」とされてきました。でも、誰しも年を重ね、病や事故に遭えば、支えを必要とする立場になるかもしれません。その時、社会のあり方が自分自身や家族の生きやすさに直結します。互いの立場は遠いようで、実は隣り合わせ。けれども間には大きな壁があるように思えます。その壁をなくすには、小さい頃からの教育や日常生活の中で「一緒にいる」ことが大切です。どんな人であっても仲間である、という根本を持つこと。だからこそ、小学校時代にインクルーシブの考え方を育むことには大きな意味があるのです

「もし自分の大切な人が支えを必要とする立場になったら、あなたはどんな環境を望みますか？」

※最後までお読みいただきありがとうございました。

ご意見、ご感想等ございましたら yayoijci@yahoo.co.jp

までお寄せください。